



2013年1月9日放送

漢方頻用処方解説 荊芥連翹湯

東邦大学医療センター大森病院 東洋医学科 芹澤 敬子

1 主な効能

蓄膿症、慢性鼻炎、慢性扁桃炎、にきびなどです。

2 出典・処方名の由来

一貫堂森道伯（1867-1931）の経験方で、明の龔廷賢による『万病回春』（1587年成立）の耳病門・鼻病門の荊芥連翹湯の加減方です。

『万病回春』の耳病門の荊芥連翹湯は、荊芥・連翹・防風・当帰・川芎・芍薬・柴胡・枳殻・黄芩・山梔子・白芷・桔梗・甘草ですが、鼻病門の荊芥連翹湯では、耳病門の荊芥連翹湯の枳殻を去り、薄荷・地黄を加えたものです。一貫堂の荊芥連翹湯は、枳殻を去らずに黄連と黄柏を加えた17味となっています。

処方名は、君薬である荊芥と連翹から命名されています。

荊芥はシソ科ケイガイの花穂もしくは花穂付茎枝で、辛温で、優れた祛風作用を有し、解表します。血分に作用し、止血の効果があります。また、掻痒感や痙攣を緩和し、透疹する作用があります。

連翹はモクセイ科レンギョウなどの果実で、苦寒、上焦の清熱解毒作用に優れ、清心火作用があります。また、「瘡家の聖薬」ともいわれ、清熱し、熱毒による結節を除き排膿する作用があります。

3 生薬構成

四物湯と黄連解毒湯の合方である温清飲に、荊芥・連翹・防風・薄荷・枳殻・甘草・白芷・桔梗・柴胡を加えたものです。黄連解毒湯は黄連、黄芩、黄柏、山梔子から成り、三焦実火の瀉火剤です。柴胡を加えて清熱の作用を強めています。四物湯は当帰、熟地黄、白芍、川芎よりなり補血の基本方剤です。荊芥、防風、薄荷、枳殻によって頭面部の風熱を去り、連翹、白芷、桔梗で排膿を図っています。

4 古医書における記載

『万病回春』の耳病門に、「両耳腫痛スル者ヲ治ス、腎経風熱有ルナリ」とあり、鼻病門では、「鼻淵（副鼻腔炎）、胆熱ヲ脳ニ移スヲ治スルナリ」とあり、本来は副鼻腔炎、中耳炎等に用いられる処方です。

一貫堂医学は森道伯により創立されたもので、現代人の体質を瘀血証、臓毒証、解毒証の3つの証に分類し、体質により罹病しやすい疾患があることを見出しました。荊芥連翹湯はそのうちの解毒証体質の者に適応されます。

5 使用目標（証）

体力が中等度前後の人で、皮膚の色が浅黒く、副鼻腔、扁桃などに炎症を起こしやすい場合に用います。顔面、咽喉、上気道などに発する慢性の炎症性諸疾患に使用されます。

6 EBM

荊芥連翹湯についての学会報告をご紹介します。関西医科大学皮膚科学教室の赤松浩彦先生により、「荊芥連翹湯による痤瘡治療における奏効機序の検討」がなされました。

【目的】 痤瘡の炎症惹起因子の一つである好中球由来活性酸素に及ぼす荊芥連翹湯の影響、また、好中球遊走能、好中球貪食能、好中球を使用しない cell-free の xanthine-xanthine oxidase 系によって産生される活性酸素に及ぼす荊芥連翹湯の影響を検討しています。

【結果】 荊芥連翹湯はザイモザン刺激ヒト好中球系において活性酸素を濃度依存性に有意に抑制。また、cell-free の活性酸素産出系である xanthine-xanthine oxidase 系においても、荊芥連翹湯は活性酸素を濃度依存性に有意に抑制しました。一方、荊芥連翹湯はヒト好中球遊走能、ヒト好中球貪食能に対しては影響を及ぼしませんでした。

【考察および結論】 荊芥連翹湯は好中球機能に作用することにより活性酸素の産生を抑制するのではなく、活性酸素に対して scavenger(捕捉除去)作用を示すことにより活性酸素を抑制すると考えられました。

このことは、荊芥連翹湯が痤瘡治療において、痤瘡の炎症惹起因子の一つである好中球由来活性酸素に対して scavenger 作用を示すことにより抗炎症作用を発揮し、奏効する可能性を示唆するものと考えられました。

7 処方適用のポイント

矢数道明先生（1905-2002）の『漢方後世要方解説』には、「この方の主治は原方のごとくであるが、耳病、鼻病に限らず、解毒証体質の改善薬として広く応用される。清熱・和血・解毒の作用があつて、青年期における腺病体質者に発する諸症に用いてよい。一般に皮膚浅黒く、光沢を帯び、手足の裏に油汗多く、脈腹ともに緊張有り、主として上焦に発した鼻炎・扁桃炎・中耳炎・上顎洞化膿症等に用いられる」とあります。

8 類方鑑別

解毒証体質は年齢により変化消長を来します。幼年期は大部分の小児に認められますが、青年期になると大多数は強健となり、そのうちの少数が依然として解毒証体質が残り、壮年期以降は少なくなります。幼年期の解毒証体質は柴胡清肝散がつかさどり、青年期は荊芥連翹湯証となり、青年期、およびそれ以降の解毒証体質には竜胆瀉肝湯を運用します。

<柴胡清肝散証>

虚弱な者で常に風邪気味であり、気管支炎、扁桃炎を発症しやすく、肺門リンパ腺肥大などの結核性疾患にかかりやすい。また、風邪のあと中耳炎を起こしやすく、アデノイドを起こしやすい。以上のような小児は顔色が青白いか、浅黒い者が多く、体格は痩せ型で首が細く、胸が狭い。腹診上肝経に相当して緊張を認める。腹筋の緊張が強く、腹診をするとくすぐったがる小児は柴胡清肝散証が強く、解毒証体質者には腹診時に腹壁の異常過敏性が共通してみられます。

<荊芥連翹湯証>

幼年期扁桃炎などにかかる者は、青年期になると蓄膿症となり、肋膜炎を起こし、神経衰弱病にかかりやすい。<柴胡清肝散証>のものに比べれば皮膚の色はさらに黒味を増し、解毒証の強い者はかすかに銀色の光沢を認めることもあります。憂鬱な印象で、一般に長身で筋肉質、痩せ型。脈は緊で、腹筋の緊張が著明で、胃経に相当して心下にやや顕著な腹筋の拘攣を認めます。

<竜胆瀉肝湯証>

泌尿器系の慢性炎症など、下焦、臍部より下の疾患に運用されます。皮膚は同様に浅黒く、脈は緊。淋疾を病む者は湿脈が見られることもあります。腹証は肝経の著明な緊張を認め、臍下、臍傍より両脇下にかけて著明な抵抗を触れます。

9 症例

症 例：57歳女性。

【主 訴】慢性副鼻腔炎。

【現病歴】10年前よりスギ花粉症であったが、徐々に花粉症症状の出現する期間が延び、1年前より咽頭部不快感、湿性咳嗽が続いている。耳鼻科で慢性副鼻腔炎と診断され内服処方されるが軽快なく、漢方薬内服希望にて、X年10月3日当科紹介受診となる。

【現 症】身長 150cm、体重 58kg。少量白色痰、湿性咳嗽、咽頭違和感、頭重感。淡紅舌、薄白苔、褐色皮膚。

【経 過】荊芥連翹湯 5g 分 2 内服後、症状軽快。X+1 年 1 月 18 日(初診から 3 ヶ月 15 日後)症状消失。蓄膿完治。